

特別会員寄稿

画像検査を受ける

北里大学大学院 医療研究科
客員教授 丸山 浩一

▼ 放射線と画像検査



私の専門は、放射線医学物理学です。市民大学では、放射線とは何かという基礎及び、病院などで使われる放射線について述べました。貫通力が強いという性質を利用して、放射線を使う画像検査や治療が行われています。放射線を使って体内を画像にすると、どの部分でも見るができます。

体外から放射線を当てる方法と、体内に放射線を発生する物質を入れる方法があり、得られる画像は、例えば胸部レントゲン、乳がんのマンモグラフィ、シンチグラフィなどです。集団検診や病気の診断に欠かせません。体内を立体的な画像にできるCT検査もあります。

放射線の被ばくをしない画像検査としては、強い磁場と電波を使うMRI検査や、超音波を使うエコー検査が一般的です。

検査の知識や考え方を知り、危険性および有効性を理解して正しく向き合えば、健康維持や病気の治療に有用な方法として画像検査を受けることができると講義しました。私自身も、加齢とともに画像検査を受ける機会が増えました。経験を幾つか紹介します。

▼ レントゲン検査

レントゲン検査では、定期検診で胸の検査、近所の歯科医で歯根の検査、肩の痛みがあり整形外科で肩と胸の検査を受けました。どの医院でも画像を見せて、医師が説明をしてくれました。以前はフィルムでしたが、今はコンピューターの画面で見せられることが多くなりました。レントゲン検査は被ばくする放射線の線量も比較的少なく、いずれもメリットがありましたから、検査を受けてよかったと思います。

胸の圧迫痛があって、緊急に心臓のカテーテル検査を受けました。これは、細い管を血管に通して造影剤を流し込み、レントゲンで透視して血管の様子を見ます。苦痛は無いのですが、場所が場所だけに医師を信頼して寝ているより仕方ありません。幸い

血管の詰まりは無かったので、検査後の安心感はひとしおです。

▼ CT検査

人間ドックの腹部エコー検査で、膵臓に何か影が見えると指摘があり、CT検査を勧められて青ざめました。近年、医学・薬学・医療技術の画期的な進歩で、がんの生存率が向上していますが、膵臓がんはなかなか難しいとされます。

画像が明瞭になるように、腹部に造影剤を注入され、台に寝て数分間で検査は終了、痛みも違和感ありません。結果待ちの数日、遺書の下書きなども始め、家族にも説明しましたがあまり心配はしていない様子が有難かった。結果は白、脂肪の塊らしいとのことでした。被ばくはしましたが、白のお墨付きが得られたので結果良しでした。

▼ MRI検査とMRA検査

今年は夏前に暑い日が続き、眩暈がなかなかおさまりません。耳鼻咽喉科で検査を受けましたが原因を特定できません。脳神経外科でMRI検査を受けました。高い磁場を出す電磁石の中に頭を入れますが、ヘッドフォンで流してくれる軽音楽を聞き取れない位の騒音がします。10分程の検査時間で、痛くもかゆくもないので我慢します。脳内の様子が具に（つぶさに）画像化されます。さらに、脳内の血管を詳しく見るのでできるMRA検査も受診。

結果的には脳梗塞もなにも見つからなかったのですが、以後の治療方針を決める上で重要な画像検査でした。

▼ 余計な心配

バリウムを飲んで胃の透視検査を毎年受けています。ある年、教え子に検査されることがあり、検査中に指示を出す声がどうも震えているようで、何か悪いものが見えるのかと不安がよぎりました。あとで聞いたら、先生相手に緊張しただけとのこと。

老いが深まり病院とのつきあいも増えますが、検査や治療のメリットとデメリットを考えて、余計な心配をしないで残生を楽しみたいと思っています。

